

聖書：コリント人への手紙第一 12：1～3

説教題：イエスは主です

日時：2022年10月30日（朝拝）

11章からコリント教会の公的礼拝で生じていた諸問題が取り上げられています。今日から見るのはその3つ目、御霊の賜物に関することです。これは14章の終わりまで合計3章に渡って書かれます。この分量から見ても、これがコリント教会の大きな問題であったことが伺えます。1節の出だしは「さて、兄弟たち。御霊の賜物については」と始まります。この「～については」という書き出しは、これまでも度々出て来ました。たとえば7章1節は「さて、『男が女に触れないのは良いことだ』と、あなたがたが書いてきたことについてですが」と始まっていました。8章1節も「次に、偶像に献げた肉についてですが」と始まりました。これらはいずれもコリント教会からパウロのもとに届いた手紙に、それに関する問いがあったことを示しています。それと同様、これから見る御霊の賜物についてもコリント教会からの質問状にあったことと考えられます。

さて今回の問いが具体的にどのようなものだったのかは少し分かりにくい形となっています。先に触れた7章1節や8章1節ではコリント教会からの手紙にあった言葉が引用されていました。7章1節の「男が女に触れないのは良いことだ」、8章1節の「私たちはみな知識を持っている」はコリント人たちの言葉でした。そこに彼らの考えがどのようなものであったかを解く手がかりがありました。しかし今回はそれがありません。12章1節には「御霊の賜物については」とあるだけで、コリント人たちの考えが見えません。またこの「御霊の賜物」という言葉はどう訳すべきか、学者の間でも意見が分かれています。欄外に「あるいは『御霊のこと』」とあります。果たしてコリント人の問いは賜物についてのことなのか、それとももっと広く御霊のこと、あるいは霊的であることについてなのか、あいまいなところがあります。

この問題の背景を理解する手掛かりとなるのは14章37節です。12～14章にかけてのパウロの言葉のほぼ結論部に当たる言葉です。そこに「だれかが自分を預言者、あるいは御霊の人と思っているなら」とあります。どうもコリント教会の中には、自分は預言者であり、御霊の人であると言って高ぶっている人たちがいたようです。これまでもコリント人が自分たちは霊的で成熟した人間、霊的エリートたちであって、も

うほとんどゴールに到達した人間であると自負していたことが描かれて来ました。その彼らの高ぶりは彼らの賜物と関係していたことが、この後の3つの章から伺えるのです。そして中でも異言の賜物が中心的に取り上げられています。異言とは、人々が理解できない言葉で語ったり、賛美したりするもので、聞く人々の理解のためには説き明かしを必要とするものでした。それはしばしば恍惚状態でなされたようです。このような御霊の現れに接して人々が圧倒されたであろうことは想像に難くありません。そしてある人々は思うわけです。あのような人こそ霊的な人である。神の臨在が豊かにある人である。そして羨望のまなざしをもって見つめるわけです。そしてそのように異言を話せる人と比べると自分の地味な信仰生活は味気ないことのように感じる。大切なことが欠けているように感じる。そんな中、異言を話すことのできる人たちが我々こそ預言者であり、御霊の人であるとして、礼拝の中で恍惚状態になりながら不思議な言葉を語る。そして自分たちは特別に霊的な人間であるかのように振る舞っている。一方では、その現象に戸惑い、悩み、あるいは劣等感を感じる人たちもいる。このようにしてコリント教会の礼拝が大混乱に陥っていたことは容易に想像できます。そこで彼らはこのことについてもパウロに尋ねたのでしょう。

その問いがどういう調子であったかまでははっきり分かりません。異言の賜物を与えられている人は、それだけ霊的な人、御霊の人であると考えて良いのでしょうか、それで良いですよ？とパウロの承認、お墨付きをもらおうとしたものだったかもしれません。あるいは反対に、ある人々の異言を強調する動きに困惑して、それを是正する言葉を言ってほしいと願って書いて来たのかもしれません。パウロはそのことをここで取り上げて言います。この御霊の賜物について、あるいは御霊のことについては、私はあなたがたに知らずにおいてほしくありませんと。つまりパウロはここで、この御霊のことに関する大切な真理、彼らが心に留めるべき中心的真理を語ろうとするわけです。その内容は3節で言われます。

その前に彼は2節のことを述べました。「ご存知のとおり」と冒頭にありますように、これは今やコリント人たちが知っていること、理解していることです。それは彼らが異教徒であった時の生活です。その時の彼らは「誘われるまま、ものを言えない偶像のところに引かれて行きました」。ここで彼らが以前礼拝していた偶像が「ものを言えない偶像」と言われています。これは聖書が偶像について述べる際にしばしば用いている表現です。詩篇115篇5～8節:「口があっても語れず目があっても見えない。

耳があっても聞こえず鼻があっても嗅げない。手があってもさわれず足があっても歩けない。喉があっても声をたてることができない。これを造る者も信頼する者もみなこれと同じ。」　ハバクク書 2 章 18 節：「彫像はいったい何の役に立つのか。彫刻師がそれを刻んだところで。鑄像や、偽りを教える物は何の役に立つのか。これを造った者がそれに頼ったところで。その者は、もの言わぬ偽りの神々を造ったのだ。」　このような実際には生きていない偶像に頭を垂れ、これを拝む空しい生活をしていました。その偶像のところへ「誘われる」とか「引かれる」と言われています。誰によってでしょう。生きていない偶像へと彼らを引っ張って行った力は何なのでしょう。ある人々はこの手紙の 10 章 20 節で見た通り、悪霊の働きをここにみます。世の偶像の神は実際にはないものですが、その存在しないものを人に拝ませようと背後で働く力があること、それは悪霊であると言われました。そのことがここでも意識されているのかもしれませんが。コリント人たちはかつてはこのような暗闇の力の下にあって、物言わぬ偶像を拝む生活をしていました。そこから 3 節にある通り、今やイエス・キリストを信じ、主と告白する生活へと導かれたのです。

さて、その 3 節にパウロがコリント人たちに知ってほしいと思っていることが述べられています。「ですから、あなたがたに次のことを教えておきます。神の御霊によって語る者はだれも『イエスは、のろわれよ』と言うことはなく、また、聖霊によるのでなければ、だれも『イエスは主です』と言うことはできません。」　パウロが言っている中心ポイントは何でしょうか。それはコリント人たちは偶像礼拝から今や「イエスは主です」と告白する者へ変えられましたが、この主への信仰告白は聖霊によったということです。それは人間の知恵、自分の知恵によったものではありません。以前に見た 2 章 14 節にこうありました。「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらはその人には愚かなことであり、理解することができません。御霊に属することは御霊によって判断するものだからです。」　御霊によらなければ、十字架につけられたイエスを私の主と告白し、そこに神の知恵があると認めることは不可能であるということでした。キリスト教に好意を持つ人たちは沢山います。特に音楽、絵画、建築等、芸術分野に現れたキリスト教文化に惹かれる。また学問や医療の領域において果たして来た素晴らしい世界的貢献を高く評価する。しかしイエス・キリストを自分の個人的な救い主として信じるとなると話は別です。なぜあの人か私の救い主なのか。あの方は最終的には十字架にかけられて死んだ人である。この世から捨てられた人である。そのような人を今さら信じることに一体何の意味がある

のか。十字架に行き着くという暗いメッセージと同じ道に行くのは御免被りたい。そのように考えます。そんな中、あの十字架上で死なれたイエスこそ私の救い主、私の主であると告白するとしたら、それはただただ御霊の驚くべきお働きによる以外にないと言われているのです。

3 節前半に「イエスは、のろわれよ」という言葉があります。これは誰が言った言葉なのかを巡って注解書には沢山の可能性が論じられています。クリスチャンを迫害するユダヤ人の言葉と見る人もいますし、救われる前のクリスチャンの言葉、異邦人時代の言葉と見る人もいます。またコリント教会の中で誤った理解に立って恍惚状態でこのように話す人がいたと見る人もいますし、これは単に仮定上の言葉であると見る人もいます。決定的な答えはないのですが大事なポイントは、この3 節では御霊を内に持つ人と持たない人との対照が述べられているということです。世の中には、これと直接的に同じ言葉かどうかは別にして、「イエスは、のろわれよ」という意味の言葉を言う人はいます。あんなものは救い主ではない。あんなものは信じるに値しない、と。御霊を離れてはそう言い得るのです。しかし神の御霊によって語る人は決してそうは言いません。御霊についての重要なみことばの一つとしてヨハネの福音書 16 章 14 節に「御霊はわたしの栄光を現します」というイエス様のお言葉があります。聖霊の働きのエッセンスを一言で言い表せば、それはキリストの栄光を現すことです。キリストの素晴らしさを私たちに示し、私たちの心を感動させることです。ですからその人は決して「イエスは、のろわれよ」とは言わない。逆にもし私たちがイエスを主と告白するなら、それは確かに聖霊によるということなのです。

そういう意味でここはクリスチャンに救いの確信を与える御言葉の一つでもあります。ある人は自分は本当に救われているのかと、自分の霊的状态を疑っているかもしれません。しかしもしイエスを主と認めて告白するなら、それは聖霊の導きによるところで言われています。それは自分の力でできたことではありません。そう告白しているのはただただ聖霊のお働きのおかげなのです。聖霊の導きの下にあるということなのです。ですから後でも述べますが、パウロのここでのポイントは次のことです。それは御霊を受けているのは一部のクリスチャンだけではない。異言を語ることのできる人だけではない。「イエスは主です」と告白するすべての人が聖霊を受けている人、御霊の人であるということです。

ある人はここで「イエスは主です」と語るくらいなら誰でもできるのではないか、これはテストにはならないのではないかと考えるかもしれません。もちろんこの「イエスは主です」とは口だけの告白を意味しません。イエス様はマタイの福音書7章21節で「主よ、主よ、と言う者がみな天の御国に入るのはない」と言われました。ですからただ口でそう言えば良いということではありません。この「イエスは主です」は、正統的キリスト教信仰の要約文でした。ローマ人への手紙10章9節:「なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われるからです。」ピリピ人への手紙2章9〜11節:「それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名を与えられました。それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、すべての舌が『イエス・キリストは主です』と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」イエス・キリストをこのように主とあがめて絶対忠誠を誓うこと、この方のみを主とし、従う生活をするをこれは意味します。世の中には当時の為政者ローマ皇帝をはじめ、目に見える多くの主が存在する中、キリストこそを私のただ一人の絶対の主、全生涯をおささげする主と告白し、従うことです。その主とは十字架上で私たちのためにからだを裂き、血を流して死なれたお方であり、また三日目に復活し、天に上げられた主です。この方を私と私の人生の主として告白し、従う歩みをするのは聖霊によらなくては不可能であるということです。御霊が私の目を開いてキリストの素晴らしさを見させ、私の心をいわばキリストの虜としてくださらなければ、それは起こり得ないことです。あの十字架のキリストの内にすべての宝と富があることを見させてくださらなければ決して生じ得ないことです。

パウロはこのように言える人はみな御霊による人であると言っています。簡単に言えばクリスチャン全員です。特定の賜物を持った人だけが霊的な人なのではありません。目立つ人、派手なことができる人だけが霊的な人ではありません。静かでも、地味でも、「イエスは主です」と告白し、従っている人は一人の例外もなく全員、御霊の人なのです。次回、私たちに与えられている賜物には色々あることが言われます。目立つ賜物とそうでない賜物、派手な賜物と地味な賜物があります。私たちはそういった賜物の違いを比較して誰かを特別に持ち上げたり、あるいは自分を持ち上げたり、逆に誰かを蔑んだりしてはならないのです。みな御霊を受けている人、御霊の人です。それぞれの違いは、それぞれの特殊性をもって互いに支え合い、補い合い、みなに益に仕えるために発揮するようにと与えられているものであることが次回言われます。

私たちは今日の箇所からパウロが「あなたがたに知らずにいてほしくありません」と言ったことをしっかり受け止めたいと思います。それは聖霊によるのでなければ、誰も「イエスは主です」と言うことはできないということです。もし私が主イエスへの信仰を告白しているなら、それは聖霊のおかげです。聖霊の力強い変革の力に私が生かされているという素晴らしい事実の証明です。特別目立つ賜物がなくても、ひがまなくて良いのです。この御霊を受けている人として、どう生きるべきなのか、続くパウロの言葉に聞きたいと思います。私にも何らかの御霊の賜物が与えられています。それをもってどのように生きるべきか、御霊をいただいている恵みにどのように答えるべきか、使徒の教えに聞いて、そこにある神の目的と祝福に生き抜く者へ導かれたいと思います。